



左：大学時代のサークルの集合写真。上から2段目、右から2人目が佐賀さん
右：大学時代の友人とは卒業してバラバラになってもずっと仲よし

「アフリカの子どもの瞳はなぜこんなにもキラキラと輝いているのだろう」。日本から約1万kmも離れたその土地に思いを馳せたのは高校生の頃。きっかけは、通学路に貼られたJICA海外協力隊（以下JICA）のポスターでした。それから漠然と国際協力の仕事に興味を抱くようになります。

月日は流れ関西大学に入学。勉強にサークル、バイトと、大学生らしいキャンパスライフを楽しくしていました。しかし、3年次生の時にちょっとした変化が。いつも一緒にいる友人たちが海外留学に旅立ったのです。私とは違う、「いいな〜私も留学したい」なんて、海外への憧れ程度で話していたのですが、目標を持って海外で頑張る友人を見て、次第に考えるようになっていきました。これまで何となく大学生活を楽しんできたけど、本当は私は何がしたかったのか。そのとき、脳裏に浮かんだのがあのポスター。頭の隅ではんやり浮かんでいた。国際協力、という言葉が鮮明に見えました。

脳裏に焼き付いた一枚のポスターとの出会い

それから実行に移すまでは早かったです。さすがにアフリカまでは行けませんでした。フィリピンで孤児院を修復したり、子どもたちと遊んだりするボランティアに参加しました。喜んでくれた子どもたちの笑顔がとても愛らしくて、私まで嬉しくなっていました。滞在中、来てよかったと思っても思ってしまったのです。

自信と誇りを獲得する準備期間

フィリピンでの経験は私の国際協力の仕事への憧れをより強くしました。しかし、専門的な勉強をしてきたわけではなく自信が持てなかったのです。

大学を卒業すると、営業畑を歩んできた父の背中を追って、食品メーカーの営業として働きました。真剣に取り組む、結果も出しました。でも4年目に入ってから仕事が落ち着いたタイミングで思ったんです。「本当にやりたいことは結局できていないけどこのままでいいのか」。また浮かんで来たんです。あのポスターが（笑）。それで、会社は辞めました。後先は考えていません。どうしたらアフリカに行けるか、どうしたらJICAの協力



Life is beautiful! Part2

24時間、365日。それぞれの人生、それぞれの素敵

“人生は素晴らしい”
日本各地や海外での生活や仕事、卒業後のさまざまな暮らしぶり。
日々、繰り返す喜怒哀楽の中に垣間見る、人生賛歌。
今、人生のワンシーンに迫ります。



誌面が動く!!
AR動画
左の写真にスマホをかざすと、動画が再生されます。詳しくは、目次ページをご覧ください。

佐賀 千紘 さが ちひろ (平成23年文学部卒業)

第18回は、本年4月から公益財団法人太平洋人材交流センター(PREX)で海外の人たちを対象にした人材育成に携わる佐賀千紘さん。アフリカ大陸のエチオピア・イルガアレムという村で、日本人女性として一人という環境のなか、ボランティアに励んだ経験を持つバイタリティに溢れた女性です。佐賀さんはなぜアフリカに行き、なぜいま日本で人材育成に携わっているのか、そのアグレッシブな人生に迫りました。



幼稚園や小学校で活動する JICA 隊員と公衆衛生指導も行う



児童養護施設でも手洗い指導。みんなで手洗いソングを歌う



NGO の子どもたちへの配給プログラムをお手伝い。「アフリカや貧困は関係なく、子どもはどここの国にいても未来に溢れ、きれいな心から瞳が輝いているのだと知りました」

ロープポンプの研修で、水を汲み上げるためのロープの作り方を教える佐賀さん



ロープポンプの調査中。きちんと水が出るか確認します



しかし、またここでも問題が。エチオピアでは、勤務時間内であっても研修に参加する方には日当を払う必要があります。当然コーヒーの手配も必要です。つまり予算が限られているのです。しかし JICA はボランティアのためそのような予算はありません。ですから県や州に掛け合せて、予算を組んでもらう必要があるのです。そしてやっとの思いで研修を開いても、終ればすぐに「早く日当をくれ」とか「金額が少なすぎる」なんて言われることが多々ありました。文化の違いとはいえ悔しくて、涙が出ました。喧嘩もし

ましたよ。それでも私はあくまでエチオピアに「入らせてもらっている側の人間」です。誰だって、他国の人間にあれこれいわれたらきつと思えます。しかし彼らも本当に困っていることなら主体的になつてくれるんです。ですから「これをやりましょう」ではなくて、伝えるべきことは伝えながら、一生懸命調査をして、彼らが必要としていること、彼らのやり方を尊重することが大事なことであります。

実は、エチオピアから帰国する直前に民族問題が起きたんです。そのとき、私は都市部に避難しましたが、当然現地の友人たちは留まりました。私が住んでいた家の周辺も一帯が焼き討ちにありました。私にとっては信じられない出来事です。日本人には馴染みのない、民族や宗教の概念が深く根付き、教科書だけでは学べない、理解できない世界が広がっていたのです。民族問題は極端な例かもしれませんが、そのような文化的・歴史的な背景を知っているか知らないか、自分ごと感に感じることができるとかないか、国際協力の仕方、あり方は随分と変わってくるのでは

ないかと思っています。
エチオピア小話
皆さん、アフリカってどんなイメージがありますか？カラフルな衣装をきた人々が一日陽気に踊っている、そんな姿を想像するかもしれません。私もそうでした。ですがエチオピアに着いてびっくり。握手は手を添えて礼儀正しく、伝統衣装も真っ白で落ち着いた感じ。実はエチオピアはサハラ砂漠より南にある地域のなかで植民地化された歴史が唯一なく、独自の文化が残る国なんです。公用語はアム

隊に入れるのか、そればかり考えるようになっていたんです。会社を辞めてから協力隊の試験を受けるまでは2年。自分の経歴や語学力では選考を通過できないと考え、ベトナム、フィリピン、オーストラリアへ、ボランティアや語学留学、ワーキングホリデーに行きました。校友会の皆さまのなかには、社会人で空白の時間が2年できることにリスタクを感じる方もいると思います。ですが私は2年かけたことで、自信のない自分と決別し、本当の意味でこの道に進む不安や迷いを断ち切ることができました。誰しも新しいこ

とを始める際には迷いや不安があるものです。しかし自分に誇りを持つことが結局は近道なのだと思えます。
どんなによい支援も 相手を尊重せずには届かない
2017年10月、私は単身、東アフリカはエチオピアのイルガアレムという村にいました。JICA に合格し、ついにアフリカにやってきました。任されたのは水に関わるプロジェクト。イルガアレムの村では、各家庭で井戸を所有しているケースが多いのですが、不衛生なうえ、家畜や子

どもが落下する事故が多発していました。そこで JICA はロープポンプとって、ハンドルを回すだけで簡単に井戸から水を汲み上げられる装置を設置しました。しかし現地の役所には水の管理を担う部署があるにも関わらず、ポンプは壊れたら放置されてしまうのが現実でした。そこで私がポンプのメンテナンスを担当することになったのです。

ところが、なぜか仕事がない！(笑)。その代わりに毎日職員たちと二日中、カフェでコーヒーを飲むのが仕事でした。エチオピアといえばティーセレモニーならぬ、コーヒーセレモニーがあるほど、コーヒー文化が浸透した国です。彼らにとって大切な習慣なのは当然のこと、そもそもエチオピアの方々にとってポンプの仕事は優先度が低いことも理解していました。しかし、「これじゃあ、何しに来たの!?!」という話です！やる気のある職員や、村をよくしたいと考えている村民を何とか探し出して、一緒に村々を廻りポンプに関する困りごとの調査を始めました。そのなかで、どうすれば私がいなくなった後も現地の職員だけで対応できるかを考え、研修を企画したのです。

公益財団法人太平洋人材交流センター(PREX)のご紹介

PREXは開発途上国の発展の核となる人材を育成し、その活動を通して関西の国際的的人材交流促進に取り組んでいます。

海外からの研修員の受入・研修員帰国後の現地でのフォローアップや専門家の派遣といった、海外向けの事業だけでなく、日本企業向けにグローバル化促進のための人材育成や留学生・日本人学生向けのグローバル人材育成も行っています。



研修員は、開発途上国の産業振興に関わる行政官や企業幹部の方々



10月には、「ベトナム人リーダー育成研修2020」を実施予定。今後も、さまざまな研修を予定していますので興味のある方はぜひ一度ホームページを覗いてみてください。

お問い合わせ先
 公益財団法人太平洋人材交流センター(PREX)
 〒543-0001
 大阪市天王寺区上本町8-2-6
 大阪国際交流センター2階
TEL 06-6779-2850
FAX 06-6779-2840
HP <https://www.prex-hrd.or.jp/>

人のなかで、ベトナムと日本の働き方の違いで悩んでいる人に向けた研修を行う予定です。今後は、関大の留学生向けにもそういった研修の場が持たれていくと考えています。

既に経済学部の後藤健太教授には指導者としてお力添えをいただいておりますが、もつと関大との繋がりができればいいなと思っております。校友の皆さまのなかには関西で活躍されている方が多くいらっしゃると思います。経営理念や仕事の仕方についてお話しただけのような機会を持てればとても嬉しいですね。

私は人材育成において、日本人が現地で指導を行うよりも、現地の方が日本で学び、彼らが現地の方を育成するほうが適していると考えています。実際、私がエチオピアで研修を行った際、活躍してくれたのは日本で研修を受けた経験のある現地の方でした。彼らは日本人が伝えたいことをよく咀嚼し、現地に合った立ち回り方をしてくれるのです。先述した通り、私たちはあくまで外野の人間で彼らの生き方、考え方を本当の意味で理解し、行動することは簡単ではありません。しかし彼ら側の

力を借りることができれば、その隙間も上手に埋めることができるはずですよ。

人が好き、人と過ごす時間が好きだからどんなときも頑張れる

PREXは、世界をよくしたいと考える人の集まりです。近年SDGsの達成が世界の課題として掲げられていますが、PREXがめざす先はSDGsが達成された世界そのもの。そんな現状だからこそ、誰もが世界をよくするための活動ができる仕組みを作れないか目下奮闘中です。

そして、私はそうやって仲間と努力している時間が大好きです。その時間に私は、「It's beautiful」を感じています。人は一人では生きていきません。私がエチオピアに行ったときも、そうでした。家探して苦戦したり、度々停電や断水に悩まされたり、虫の出没に怯えたり(笑)、そして仕事で涙を流したときも、一見いい思い出ではありませんが、傍で手を差し伸べてくれた人がいて、その人と一緒に困難を乗り越えられた。だから結局はどれも楽しい、嬉しい瞬間、輝く思い出です。



左:エチオピアの同僚たちと日課のコーヒータイム
 右:友人の家族と伝統衣装を着て新年を祝う



左:エチオピア派遣前研修で出会ったボランティア仲間。それぞれ世界各国へ飛び立つも、いまでも親交が続いている
 右:ボランティア仲間とエチオピアのダナキル砂漠へ旅行



ハラ語、コーヒーを愛していて、カフェと一緒にコーヒーを飲めばみんな友人。主食は、テフというイネ科の穀物。クレープミタにしてシチューや野菜炒めなどのおかずを包んで食べます。民族の数は80以上を数え、みんな誇りを持っています。日本人に似たところがあるという人もいますね。警戒心もありますが優しいんです。

たとえば私が家探しをしたときのこと。実は私、フィリピンや、アフリカなどに行っておきながら、潔癖症なんです(笑)。だからどんな国でもできれば洋式トイレが欲しかったんです。しかし、私がいたイルガアレムは、田舎だったこともあり、家の傍の田んぼにビニールシートで囲われた汲み取り式トイレがあるだけ。なかに小さな穴があってそこに向かって用を足します。それに、はじめは食事が合わなくて、嘔吐することがしょっちゅうだったんです。「どうやって小さな穴の汲み取り式トイレで吐くの!」(涙)って、もう必死で洋式トイレ付きの家を探さなければならぬんです。一軒一軒、村中の家を訪ねて、条件に合った空き家がないか聞いて回るのが「そんなも

のこの村にあるはずないだろう!」と何度も言われましたね。あたりまえですよ(笑)。ですがそんな私を見かねて、同僚の知り合いの方が大きな町からわざわざトイレを持ってきてくれたんです! 本当に嬉しかったです。

ほかにも、停電や断水で困ったときは必ず近所の人が助けに来てました。苦手な虫も代わりに退治してくれましたし、とにかく、村の人々なしには生きていけませんでした。もはやどんな状況でも過酷というより楽しく感じるほど彼らの支えが傍にありましたから。

これからは人材育成で国際協力を支えていく

エチオピアから帰国したのは昨年の10月。今年の4月からは公益財団法人太平洋人材交流センター(PREX)、以下PREX)で働いています。開発途上国の行政官や経済団体の方に日本にお越しいただき、経営管理や貿易に関する研修を行った、日系企業の実地幹部職員や在留学生向けの研修を行った、人材育成を支柱に置いた幅広い事業に取り組んでいます。10月にも、日本で働くベトナム